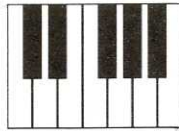


ピアノ指導の現場から



◆◆◆日常生活の中に ピアノレッスンのアイデアを◆◆◆

ピアノのレッスンといえば、指導者・生徒ともに、どこか余計な力が入って、時には堅苦しさをともない、「ピアノのための」けいことなるケースが多いのではない。何らかのコンクールに参加ともなれば、弾き手とピアノが四つに組んだように見える時もある。

楽天的な私は、生徒の可能性に期待し、楽しみながらレッスンし、生徒たちとともに歩むように心掛けてきたつもりである。そしてある時、ヨーロッパ住まいの先生から、生活の中にさりげなく存在するレッスンのヒントを得たのである。

「同じ曲でも個性を大切にし、人によって言うことが違うので、グループ全員の演奏を聞きよく把握すること」という言葉に続いて、「ピアノはフォークとナイフの国の文化の楽器です」とりわけ食べることの好きな私は、フォークとナイフを扱う生活の中でピアノを弾くことの接点を追い求め始めたのである。

食卓の椅子の形、高さ、座り方、テーブルの高さ、セッティングされた皿の料理をさばく距離は、ピアノを弾く時の体と鍵盤の距離と大差ない。背筋を伸ばしてかかとを床に付け、体を安定させる姿勢で両手をしなやかに扱う動作は、ピアノを弾く姿勢につながるのだと納得し、「生活の歴史」の深さを知らされた気がした。

足台の高さの重要性や鍵盤と体の間隔について、生徒たちはすぐ理解し、数センチの高さの足台が必要とあれば、手作りして楽譜と一緒にレッスンに持参する姿がほほえましい。実際、ナイフとフォークを軽く握らせてみると、指先に重みがかかり、肩からの楽な動きがピアノの打鍵につながる、という感覚を意識しはじめる。

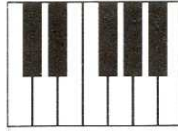
皿の料理が硬かったり形が扱いにくかったりすると、思わず肘に力が入って、いわゆる硬い音になる。速い指の流れはもつれやすくなるが、力を入れて真面目に弾く生徒に気分転換としてナイフとフォークを持たせてみると、両手で握りしめて真剣な表情になる。「大好きなホットケーキでもこうするのかあ？」と声を掛けると生徒の気の張りがすうーと抜けることもあり、そんな瞬間に、レッスンすることのささやかな充実感・幸福感を味わったりしている。

これからはキーを軽くタッチする感覚と、鈍くタッチすれば押した文字が画面にいくつも並んでしまっただけで慌てさせるパソコンを、ピアノの打鍵との共通性につなげて探求するほうが理解しやすいのかもしれないと思っ、食卓にパソコンを置き始めたところである。

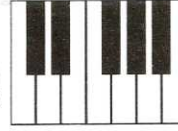
(ピアノ指導者/名古屋在住)



おほぼやしひろこ
大林裕子



～連載～ ピアノレッスンの今後



Music Key Lesson レポート

岩瀬洋子・田村智子

ミュージックキーではこの春、クラスコンサートを行いました。それぞれ10名ちょっとの人数で、時間も1時間以内で終了するようにプログラムを組みました。会場はフラットで舞台と客席が一体感を持ってよう配慮しました。生徒たちの取り組み方はそれぞれ年齢によっても違いますが、当日を迎えるにあたりどの生徒もまじめに取り組むことができたのではないかと思います。発表会というついつい指導者が夢中になってしまいがちです。私たちも生徒の気持ちより、曲としての完成度にこだわっていた時期もあったのでは・・・と今思うのです。発表会を経験することで生徒が精神的にも技術的にも成長できること、そしてピアノが弾けるといっ自分を変えて幸せに思っしてほしいのです。と同時にご家族の方々にもそれを感じていただきたいと思っます。つまりご家族の理解と協力なくしてレッスンを続けていくことはできません。ですからコンサートにはできるだけご家族みなさまにお子様真剣にピアノを弾かれてる姿を見て頂くよう事前にお願っします。日ごろお忙しご両親。子供さんの家で練習もなかなか聞かれることが少ないようで、「うまいもんですね～」とまんざらでもない様子でした。

ある低学年のクラスでは、親御さんに子供の演奏する前に、簡単なメッセージを送ってあげてほしいとお願っしました。日ごろなかなか子供を前にほめることが少ないようで、この日は愛情たっぷりのステキな言葉を子供のために考えてくださり、聞いていてもとても感動的でした。思いがけないお母様、お父様からのやさしい応援に照れながらもうれしくて、演奏も普段以上のできばえでした。いくつになっても子供って両親に褒められるのが一番なんですね。生徒のやる気の原動力はやっぱり家庭か・・・とつくづく感じた心温まるコンサートでした。

☆☆☆講座のご案内☆☆☆

●魅力的なピアノ教室実現のための「導入指導マスター講座」

講師：岩瀬洋子

今「ピアノのおけいこ」のあり方（練習しない/親子で根気がないなど）に多くのピアノ教師が悩んでいます。そこで現状を踏まえた「魅力的な教師（指導、教室作り）が今真剣に求められています。この講座はそのために何が必要か、実践できる「指導者としてのテクニック」を学べる、まさに今の時代に求められる講座です。受講者は[Music Key認定証]を取得できます。

【東京】[日時] 5/17. 6/7. 7/5. 9/6. 10/4. 11/8. 12/6 (全て金曜日) 9:45～12:00 [会場] 東京芸術劇場第5会議室 (池袋駅西口徒歩3分)

●「アルフレッドレベル別講座」講師：田村智子

[日時] 9:45～12:00 5/17(導入コースF) 6/14 (基礎コース2) 7/19 (基礎コース3) 9/13 (基礎コース4) 10/18 (基礎コース5) 11/15 (基礎コース6) 12/13 (応用編)

【会場】池袋芸術劇場第7会議室 9時45分～12時

●生徒の環境を踏まえ実践に即した「ピアノ指導法」

《生徒に振り回されない工夫導入編》

3回シリーズ5/28 (火) 6/25 (火) 7/16 (火)

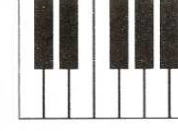
【会場】沼津すみや 時間10:30～12:30

【問合せ・申込み】ミュージックキー

Tel/Fax 0559-89-3900 (担当：植松)



ここだけのNEWSなCD



ショパンの旅路IV

高橋多佳子 (pf)

Tri-M Classics DICC-28011 ￥2,940

諫山 隆美

(いさままたかよし 音楽評論家)



5年に1度、ポーランドで開催されるショパン国際ピアノコンクールは、とりわけ難しいコンクールのひとつとして、世界に広く知られています。このコンクールでエニウクなのは、課題曲がすべてショパンの作品。これは1927年の第1回から全く変更されていない、大きな特徴です。こうした特徴はコンクールの性質を明確にしますが、一方で「ショパン弾き」というイメージや偏ったレパートリーから脱却するのが、入賞後の大きな課題であると言われてきました。

1990年のショパン・コンクールで入賞した高橋多佳子は、あえてショパンで勝負しています。なんとなくショパンをたくさん弾いてショパン弾きですといった方法ではなく、ショパンの生涯を追って、作曲された順に同時期の作品を選んで、ショパンの全体を見ようとする方法です。これにはショパンの全曲をもれなく弾くという方針はありませんが、しかしショパンの重要な作品はすべて網羅され、ショパンの作風の変化に追っています。もはやショパンをたくさん弾けずといった次元を越え、ショパンの多彩なスタイルを熟知してそれぞれの魅力を聴かせているのですが、しかし安心して聴ける典型的なショパンのスタイルを崩すことはありません。そればかりか、よくその演奏に耳を傾けてみると、メロディーをしっかりと歌い上げ、歌う魅力を前面に押し出したショパンに仕立てられています。

ショパンコンクールから約10年経ってようやく煮詰められたショパンの重要な作品の数々は、「ショパンも上手な」ピアニストとは一線を画し、彼女らしい領域を見事に形成しています。こうした録音活動は、コンサートとも平行しながら暖められては披露してというペースで展開しています。

さて、ショパンコンクールの入賞者がこのように活躍している一方で、それに比較される唯一の大コンクール、チャイコフスキーコンクールが今年6月、モスクワで開催されます。2000年のショパン・コンクールでその全演奏評をホームページでご紹介し、大変な反響をいただきましたので、今年のチャイコフスキー・コンクールのピアノ部門も、全演奏をホームページでご紹介していきます。世界から集まった約100名のピアニストが競うこのコンクールから、次の世代の巨匠誕生が楽しめるのかも知れません。あなたのパソコンが6時間遅れのモスクワ時間となり、寒い国での暑い戦いを、ぜひご覧ください。

<http://www.piano.or.jp/review/isa/>

プロフィール

現在「ムジカノーヴァ」読者頭カラー演奏会評、連載「ピアニストを聴く」[ショパン]誌演奏会評、「音楽現代」誌CD新譜批評をレギュラーで執筆する他、コンサートのプログラムノートやCD曲目解説などを手がける。その他音楽鑑賞の講座講師を各地で務め、評論のみならず鑑賞、啓蒙の分野でも活動が続いている。2000年10月はフルシャフで開かれたショパン国際ピアノコンクールの全演奏をホームページ上で即日レポートを公開。前代未聞のこの試みは国内外のマスコミから愛好者に至るまで大きな注目を浴び、膨大な数のアクセスを得る。今年2002年はモスクワのチャイコフスキー国際コンクールのピアノ部門の全演奏をwebで公開予定。この3月からは社団法人 全日本ピアノ指導者協会のホームページにて演奏会評「昨日のピアノ」を開始。翌日正午には前日の重要なコンサートの模様をご紹介するというこの試みは、早くも多方面から話題を集めている。

<http://www.piano.or.jp/review/isa/>